

茨城NPO情報

MONTHLY COMMONS

茨城のNPO活動を応援する月刊情報紙

1...巻頭コラム・NPOのひとびと・トピックス
2...NPO一日体験・情報掲示板・五軒町だより

編集/発行

特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・commons
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町2丁目2番23号102

☎029-300-4321 FAX 029-300-4320

URL <http://www.npocommons.org>

E-mail info@npocommons.org

第11号

2003.09

NPOの現場回ります

コ
ラ
ム

先日、コモンズの2003年度総会が台風のなか開催された。

99年度から始まったコモンズは今年で5年目。NPO法も、来る12月1日で施行5周年だ。県内のNPO法人数も160を超え、5年前に比べると随分社会に定着してきた。特に行政、学校、企業などでNPOとの連携や協力を模索する動きが増えている。▶コモンズはNPOの個別支援、法制度や活動環境の改善、企業や行政との協働の推進を目指してきた。5年前、NPOとNPO法の普及からスタートした頃は、フォーラム会場などで、何のメリットがあるのか、日本に定着するのか、といった疑問がよく寄せられた。▶次第に、地域にNPOが増えてくると、組織運営や各種手続きに関する問い合わせが増え、研修事業が本格化した。各団体は行政からの委託事業に取り組むようになり、コモンズの事業規模も拡大した。有給職員を抱えたNPOでは、事業と運動の両立という課題に直面するようになった。運動面で大きな目標であるNPO支援税制は、2000年と2002年に国会議員と共に制度を変えてきたが、認定NPOの壁は厚い。NPOを担う人づくりへ、学生インターンに続き、求職者向けの職業訓練の卒業生が今後、NPOアドバイザーとして各団体のサポートにあたる。▶今年はNPOの現場を回りながら、しっかり情報、経理面などをサポートしつつ、各団体の声を集めて、融資や物品仲介など、NPO全体に必要な制度や仕組みを実現していきたい。

(文 横田 能洋)

勤労者マルチライフ支援事業
勤労者ぼらんていあ・ねっと
<http://www.volunteer-net.jp>

余暇や退職後の時間を活用して、ボランティア活動を始めませんか。コモンズは、あなたの社会貢献活動を応援しています!

「セカンドライフ」の充実を!

村に隠れた知に生きよ



地域にはたくさんの“宝物”が埋もれている。自然、技術、文化など。その宝物を捨てて、貨幣経済一辺倒に進んでいることが社会の乱れの原因だと、岩手県沢内村のNPO法人「西和賀文化遺産伝承協会」事務局長の廣瀬龍一さん(62)は考える。

村に入った理由

N
P
O
の
ひ
と
び
と

濃密な人間関係が嫌で村を捨てる人々がいる一方で、村へ、喜びつつ入ってゆく人々もいる。「個の時代」と言われる中で、流れに逆行するような人々の意識や衝動を、どうくればよいのだろう。廣瀬さんは約10年前に大手建設会社を脱サラし、単身で、同村に移住した。

廣瀬さんが同村に入った理由は、企業間の競争に疲れたわけではなく、都会の暮らしに嫌気が差したわけでもない。東京生まれで、仙台にある東北大学で学生時代を過ごしたので、東北への縁は確かにあった。リゾート地の開発の仕事などを通じて、心の中で理想郷のイメージを膨らませていたこともある。

理由はこうだ。偶然、仕事の上で訪れた沢内村の人々との触れ合いがこの

岩手県のNPO法人 西和賀文化遺産伝承協会 廣瀬龍一さん

ほかに心地よかった。

そして村の共同体の知恵の奥深さに、「昔の人の暮らしは本物だ」と直感した。すぐに転住を決めた。キャリアや安定した暮らしへの未練は特になかった。

結の底流を流れるもの

廣瀬さんの、一番目の宝物は、今もそれとなく残る、村のルール・結(同村周辺では「ゆいっこ」と言う)。「ゆいっこ」は、農作業や屋根の葺き替えの共同作業などの約束事だが、廣瀬さんに言わせると、「村で生きる者は、他の家の者であっても、家族同然と考える意識」のこと。

そして、「ゆいっこ」の背後の、村の人々の意識の底流にある、自然や神のなへの敬虔さが日々、廣瀬さんを驚かせる。

自然に依存して生きる人々の、農作業のけじめや盆正月に行う伝統行事などは、祖先の残した遺産であり、言わばこの地で生きるための“経典”。村のお年寄りたちの姿には、住んでいる自然環境と波長を同じくする意識が息づいている。

「見かけの快適さを求めて、村の決まりやしきたりを逃れていった人たちは、今あちこちで矛盾に突き当たっているのではないかと廣瀬さんは話す。

宝物探しのツール

宝物探しは、そうした古くからの知恵と接触するツールとなる。そのひとつ

が「地元学」。地域の宝物を発見するには、「地元の案内人(お年寄り)」、「よそ者(数人)」、「地域の地図」、「カメラ」があればよい。

案内人に自分の日常のテリトリーを歩いてもらう。よそ者が珍しい事物を発見したら、写真を撮影し、地図に記録し、案内人のコメントを載せると「資源カード」が出来上がる。

地元の人が見慣れている事物のよさを、よそ者が見出し、地元の人たちが再認識する、というのが基本の構図だ。

地元のお年寄りが『こっだな(こんな)ものを』とするものを、よそ者は「なんて素晴らしいんだ」と発見する。どんな所でもいろんな宝物が見つかる。

この作業を通じて、「地域に会話が生まれ、自然に元気になる」。

「祖先からの知恵を生かし、自然と共生する生き方は、人間の生きる基層だ」と廣瀬さんは話す。それが、社会の乱れを食い止める役目をする。川にたとえるなら上流域と下流域。村に現存するさまざまな文化が消えてしまえば、都市の社会や経済は混乱する。

村での宝探しを通じて、自然と共生する自分や、暮らしの底を流れる豊かさに、再び出合えるかも知れない。

(文と写真 佐竹 明)

NPO法人「西和賀文化遺産伝承協会」

岩手県和賀郡沢内村長瀬野25 <http://www.seibunkyo.org>

TOPICS

NPO・企業・行政の連携と協働事業を実現するため、コモンズ・県経営者協会・大好きいばらき県民会議が共催するフォーラムが、今年9月26日(金)に県産業会館で開かれる。

午前中は、講演会「宮城・仙台における企業とNPOの連携・協働の仕組みについて」。宮城では、企業が不要になった事務機器やパソコンをNPOに寄贈するサポート資源提供システムが立ち上がり、今年から資金助成も加わるなど、民が民をサポート

する仕組みづくりが進んでいる。午後は、4テーマに分かれ、茨城における協働の可能性を討議する。第1分科会「地域福祉」は、市民の地域福祉

26日にNPO・企業・行政協働実現のための交流フォーラム

ニーズ調査を踏まえた政策提案、福祉サービス提供のコンビニ化、福祉作業所の仕事開拓、地域福祉巡回シンポなどについて提案がなされる。第2分科会「子育て子育て」は、中心市街地で

の子育て支援拠点の開設、次世代育成支援法に対応した企業体制の整備などが話し合われる。

第3分科会「里山保全」は里山保全活動への地元住民や企業従業員の参加促進策を検討する。

第4分科会「NPO支援」は、中間支援組織からみた地域のNPOの現状と課題、中古物品仲介や融資システム、税制優遇、茨城NPO連絡会の設立準備などを話し合う。連携と協働に関心のある方は是非、ご参加を。